

昭和六十三年一月・軍事史学会編
「軍事史学」第二十三卷第三号抜刷

エリス事件

—日本海軍はエリス少佐を毒殺したか—

平間 洋一

史料紹介

エリス事件

—日本海軍はエリス少佐を毒殺したか—

平間 洋一

一 エリス事件の概要

米国海兵隊のエリス(Earl Hancock Ellis)少佐は、一九二〇年八月二十日、海兵隊司令官レジヌス(John Archer Lejeune)に、将来の戦争に備え南アメリカや太平洋地域の情報収集の必要性を訴え、自分がこの調査に当たるが海兵隊には迷惑を掛けぬとの上申書を提出した。このためか、海軍大学校教官への人事発令が取りやめられ、同年十二月に海兵隊司令部戦争計画課に配置された。⁽¹⁾

そして、翌年五月に海兵隊の対日戦争計画(Marine Corps Operation Plan 712H)の基本ともなったミクロネシア

前進基地構想(Advance Base Operation in Micronesia)を完成すると、上陸作戦実施適地及び日本軍の防備状況を実地に調査するため、貿易商と身分を偽称し一九二二年十月にミクロネシアに潜入した。

しかし、潜入半年後の一九二三年五月十二日に、以前の持病である腎炎が悪化し、パラオ諸島のコロル島において、日本人医者の診察・投薬を拒否しつつ死亡してしまった(史料1)。

一方、エリス少佐の遺体受領を口実に、ミクロネシア(本論では第一次世界大戦により日本の委任統治領となった元南洋群島を意味する)の情報収集を意図した米海軍は、五月二十六日に駐日海軍武官補佐官ヒューリングス(Garnet Hulings)大尉を海軍省に送り、エリス少佐が貿易商ではなく、現役の海軍士官であることを知らせるとともに、確認のため遺体及び遺留品を受け取り米海軍横浜病院に運びたいと口頭及びメモで(史料2)、さらに二日後の二十八日には正式文書をもって申し出た。

日本海軍の了承を得ると駐日武官コッテン大佐(Ryman A. Cotten)は、シベリア出兵のため横浜に開設中であった米海軍横浜病院薬剤課長ゼムシュ(Lawrence Zembusch)を遺体受領のため派出した。しかし、一カ月後の八月十四日には帰路に寄港したサイパンで罹患した高熱と下痢

のためか、ゼムシユは横浜入港時には出迎えの人も見分
けられない容態で帰国し、直ちに米海軍横浜病院に入院
させられた。

しかし、手当てが加えられ記憶が徐々に蘇り、真実が
判明しようとしていた九月一日に関東大震災が発生、ゼ
ムシユは倒壊した病院の下敷きとなり圧死してしまっ
た。⁽²⁾

そして、この二つの事故が、コッテン大佐や米国民
に、日本はスパイを入れないという警告のため、エリス
少佐やゼムシユに麻薬を盛ったのではないかとのエリス
少佐毒殺疑惑及びミクロナシア要塞化疑惑を更に深めて
しまった。

米国の新聞はこの事件を「説明されない死 (Unexplained
death)」「不可解な死 (Mysterious death)」「更に噂によれ
ば」「事故を装った殺人 (Accidentally Killed)」等と報じた。⁽³⁾
この事件を当時留学生(後の米海軍情報部長)であった
ザカリヤス (Ellis Zacharias) 大佐は、回想録 "Secret Mission"
では毒殺されたと記し、太平洋艦隊情報部長レイトン
(Edwin Layton) は『太平洋戦争 暗号作戦—アメリカ太
平洋艦隊情報参謀の証言』で「行方不明となった」と一
九八七年に発刊された回想録に書いた。⁽⁴⁾
更に、米国公文書館や海兵隊司令部史料課等の一次史

官補佐官のヒューリングス大尉が海軍省を訪れ、海軍省
副官洪泰夫中佐に「Body and Belongings」とメモで、二
十八日には「Body and effects」と書簡(史料4)で、米
海軍横浜病院へ運びたいと申し出ており、これらのこと
から遺体が火葬されていないことは承知していたと考え
られる。

また、回想録は遺骨や遺留品を受領に代表を派遣した
いと申し出たところ、日本海軍はこの米海軍の予想外の
申し出に、毒殺の陰謀が露見することを虞れ、戸惑い回
答が遅れたと記している。

しかし、この部分も日本側記録によると二十六日のヒ
ューリングス来訪時に、洪中佐から南洋諸島は「昨年四
月以來、全ク海軍ノ手ヲ離レ居ルモノニ付、爾後ノ御交
渉ハ外務省ヲ経テ南洋庁ニ致サル事適當(史料5)」との
説明を、また、二十九日には「横浜迄死体送付ノ件ハ、
仮埋葬後ノ今日、先方ノ情況不明ニ付」問い合わせた後
に回答するとの文書による回答(史料6)を受けており、
語学能力不足による誤解があったとは考え難く、米側は
この問題が海軍の管轄ではなく、外務省の管轄であるこ
とはこの時点で了解したのであろう、この日以後この問
題で来庁した記録はない。

事実、海軍はヒューリングス来訪の翌二十九日、海軍

料(史料3)や現地を調査した学者らの研究論文等にお
いてさえ、「米国にエリス事件のニュースが伝わって以
来、明確な証拠は全くないが、エリス少佐は日本人に毒
殺されたと言われて来た」⁽⁵⁾「エリス少佐の死は飲酒と様
様な持病によるものと考えられるが、死亡した原因は不
明であり、日本人に毒を盛られた可能性なしとしない」
と毒殺を示唆する表現が今日でも多々見受けられる。
本稿はこれらエリス毒殺説に対し、反証史料を提示す
ることを目的とした。

二 毒殺疑惑に対する反論及び反証

なぜ、米国にエリス少佐毒殺疑惑が生じたのであろう
か。それは米国のエリス研究家が東京に於ける日米(海
軍省と駐在武官)の交渉を、事実とは大きく異なるザカ
リヤス大佐の回想録に求めたためと思われる。

ザカリヤスの回想録によると、「エリス少佐の死亡一
日前に日本海軍から危篤を知らされ、その翌日に死亡し
たとの通知と火葬に付したとの通知を受けた。

そして、日本海軍が死亡後直ちに火葬に付したのは、
米海軍の検死により毒殺が露見することを恐れたためと
の疑惑を持った」旨述べている。

しかし、日本側の記録によると五月二十六日、駐在武
官副官から外務省欧米局宛に文書をもって以後の処置を
外務省に依頼するとともに南洋群島在勤武官にも問い合
わせたのであろう。五月三十一日に南洋群島在勤武官か
ら軍令部・海軍省両副官宛に

「商業視察ト称シ、旅行中ノ米国人B三酒精中毒、
五月十二日コロールニテ死亡。遺物ニハ軍事関係書類
ヲ発見セス。

本人ハ現役海軍中佐ノ由、事実ナリトセハ、職業ヲ
偽リ旅行承認ヲ得タルモノト認ム。遺物米国官憲ニ渡
シ差支ナキヤ。至急何分ノ御指令ヲ仰ク。」

との報告電報が発せられている(史料7)。
なお、この電報には海軍省軍務局員(印鑑はあるが判読
不明)の「不都合ナ行動ナルモ、ダマツテ□テ、当方デ
同種ノコトヲヤッタ場合ノ言ヒ懸リニ、トツトクガヨ
シ」との電報欄外の記註と、担当者の「本件、今後外務
省ノ取扱フコトナレリ」との記註がある。

海軍省には、このほか五月三十一日の処置を問い合わせた
南洋在勤武官の電報に副官が回答を忘れたためか、
六月十一日南洋群島在勤武官発信の「至急何分ノ返電ヲ
待ツ」との催促電報(史料8)及び外務省が今後処理す
るとの回答電報(史料9)があるのみである。

三考 察

このように、日本海軍はこの事件を他日のために「言ヒ懸リニ、トットクガヨシ」と考えた程度であったと思われるが、しかし、何故、米側に誤解された疑惑を持たれてしまったのであろうか。

それは当時の電報がカタカナでしか発信できなかったため、病名が確定できなかったことにあるように思われる。

すなわち、南洋庁から海軍が得た電文は前掲のとおり「五月十二日午後六時、シンシンセンモ一症ニテ死亡ス」というものであったが、「シンシンセンモ一症」という病名が理解できなかったのであろう、電報欄外に「心身譫妄症（一種ノ精神錯乱ナラン）？」との注記があり、病名に自信がなかったことが伺われる。

ヒューリングス大尉来庁四日後の五月三十一日に、南洋在勤武官から死因に関し「酒精中毒」との報告があった。しかし、エリス事件を外務省に移管した後であったためか、または現役の中佐（日本海軍は階級を中佐と誤解していた）がアルコール中毒で死亡したと断定して知らせるには、個人や米国海軍の名誉にも関する大きな問題で、相当の証拠が必要と考えたのであろうか、遂に病名

ルを手当たり次第に飲み、ある時はギボンの家に来て酒をねだったが、無いと断られると壁の中に隠したのではないかと、ギボンの家の壁を壊したこともあった」等の証言を得た。

しかし、ウォーデン少佐の英雄に対する遠慮からか、日本に対する反感からか、最後に私見として「JAPがエリス少佐をスパイとして疑っており、常時追尾されていたのだから、多分毒を盛られたのであろう。熱心な調査行動の結果、渴きを覚え、何かを飲みたかったのだから、飲み物に毒を投入することは困難ではなかったであろう」と調査結果を結び、再度真実は遠のいてしまった。

毒殺されたことにより英雄となったエリス少佐は、現在ではカンチコ海兵隊学校強襲上陸演習講堂に「エリス・ホール」とその名を残し、入口の銘板は

「米国海兵隊 Earl Hancock Ellis 少佐

強襲上陸作戦のバイオニア・戦争計画の先駆者

一八八〇年十二月十九日カンサス州イウカに生まる。

エリス少佐はミクロネシア作戦計画を作成し、

一九二三年五月十二日、日本領パラウ群島のコロ

ル島において

情報士官として、その生命を国家に捧げた。」

は米国側には知らされなかった。

そのかわり、ゼムシユ来島時にはエリス少佐関係者をバラオの南洋庁庁舎に集め、直接関係者から聴取させることにより誤解を解こうとしたのであろうか、入国を担当しエリス少佐を監視した警官のテリー (Jose P. J. Teller)、家や現地妻を紹介した英語のできるギボン (William Gibson)、現地妻メタイエ (Maria Metait) 等が集められ説明が行なわれた。

この説明で南洋在勤武官はゼムシユも了解したと考えたのであろうか、「エリスノ死体及遺物受取其他後始末完了セリ。死体開棺検分スルコトナク、七月二十七日火葬ニ付、死因ニ付テハ十分了解セルモノ如シ。」と海軍省副官に打電した（史料10）。

しかし、これら関係者から得た真実は、ゼムシユの死とともに関東大震災の瓦れきの下に埋没してしまったのであった。

米海兵隊は第二次世界大戦が終わった一九五〇年に、ウォーデン (Walter W. Worden) 少佐をバラオ群島に派遣し関係者から事情聴取等を行なった。そして、現地妻のメタイエからは「エリス少佐は常時飲んでた。彼の死因は飲みすぎ (Too much sake) であつた。」との証言を、ギボン未亡人からは「エリス少佐は酒・ウイスキー・ビールとその功績を称えている。

註

- (1) John J. Reber, "Pete Ellis: Amphibious Warfare Prophet", *U. S. Naval Institute Proceedings* (以後 *NIP* と略記す) (November 1983) : 58.
- (2) Ellis M. Zacharias, *Secret Missions: The story of an intelligence officer*. (New York: G. P. Putnam's Sons, 1946), pp. 39-50.
- (3) 米国海兵隊司令部歴史課から一一件の新聞記事のコピーを得たが、このコピーに新聞名は記載されていない。
- (4) Zacharias, *op. cit.*, pp. 39-50.
日本語版は一九五八年に『日本との秘密戦争』として日刊労働通信社から出版されているが、エリス少佐関係は著者の希望により削除されている。
- (5) Edwin T. Layton, "And I was there": *Pearl Harbor and Midway—Breaking the Secrets*. (New York: William Morrow and Company, 1985) p. 55.
エドウィン・レイトン『太平洋暗号戦争——アメリカ艦隊情報参謀の証言』(TBSブリタニカ、一九八七年) 七六頁。
- (6) Dirk Anthony Ballendorf, "Earl Hancock Ellis: The man and his Mission", *NIP* (November 1983) : 58.
- (7) Reber, *op. cit.*, p.63.
- (8) ウォーデン (Lt. Colonel Walter W. Worden) 報告、米国海

兵隊司令部歴史課にヒリス関係ファイルに所収。なお前掲
(1) Reber 論文の六一頁以下一部記載がわづらわ。

〔付録 関係史料〕

〈史料1〉 米國に於けるヒリス事件に関する著作・論文等には、次のものがあつた。

- 1 Dirk Anthony Ballendorf, "Earl Hancock Ellis : The man and his mission," *NIP* (November 1983).
- 2 John J. Reber, "Pete Ellis : Amphibious Warfare Prophet", *NIP* (November 1977).
- Ronn Ronck, "Spy in the Rock Islands", *Gimpses of Micronesia*, Vol. 23(1983).
- 3 Ellis M. Zacharias, *Secret Missions : The story of an intelligence officer*, (New York : G.P. Putnam's Sons, 1946).
- 4 Lt Col Frank O. Hough, USMC, "Personalities—Men who differed" *Marine Corps Gazette*, 34-11 (November 1950) : 30-35.
- 5 Lynn Montross, "The Mystery of Pete Ellis", *Marine Corps Gazette*, 38-7(July 1954) : 30-33.
- 6 W. L. White, "The Disappearance of Earl Ellis X", *Emporia Gazette*, Kansas, 2 Aug. 1960. no. 1 の記事は一九六〇年九月の *Readers Digest* に掲載された。
- 7 John L. Zimmerman, "The Marines First Spy", *Saturday Evening Post* (Vol. 219, No. 21), 219-21(23 November 1946) : 19, 97-100.

Sea Island Bureau should make of the body.

I have been informed by dispatch from the Navy Department, Washington, that the deceased is Lieutenant Colonel R.H. Ellis of the U.S. Marine Corps and that he had been on extended leave of absence with permission to travel abroad. I have been directed to request the Japanese Navy Department to have the body and effects shipped to the U. S. Naval Hospital, Yokohama for identification and final disposition.

With assurances that the courtesy of this favor will be greatly appreciated by my Navy Department, I am,

(署名傍線)

Very sincerely

Garnet Huilings, Lieutenant, U.S. Navy,

Assistant Naval Attache.

〈史料5〉 大正十二年五月二十九日 海軍省副官発 外務省
欧米局長宛 官房一九〇八号

「米國海兵中佐『エリス』ニ関スル件

電話御通知申上置キ□□右件 (□□書類写御送付申上□□□□

□□) 尚『シラオ』ヨリ当地南洋庁出張所宛電報ノ要領ハ

左記ノ通ニ有候。

Representative of Hughes and Co. (Rector St. 2, N. Y.) R.
H. Ellis 四二歳 旅券番号四〇二四九

右ノ者各群島情況視察ノ上四月十四日泰安丸ニテ当地上陸
『メナド』行汽船待合セ中五月十二日午後六時シンシンセ

8 "Japan's Islands of Mystery", *Saturday Evening Post*
(23 April 1942).

〈史料2〉 大正十二年五月二十六日付「ヒューリントス大尉
来省要求」の記註がある次に示す鉛筆書きのメモがある。

「Lieutenant-Colonel R.H. Ellis, U.S. Marine Corps died 12
May at Parao, Caroline islands ship body and belongings
to U. S. Naval Hospital Yokohama for identification and
disposition」

〈史料3〉 公文書関係ではマニラに国立公文書館 (U. S.
National Archives) の Record Group 80 に海軍一般「Record
Group 38 に海軍作戦部長・海軍情報部長等の文書が、マ
ニラにの米海兵隊歴史課にはヒリス関連の史料ファイル
があり、病歴関係部分を除き閲覧は可能とのことである。
〈史料4〉 大正十二年五月二十八日付の駐日米海軍武官補佐
官から海軍省副官宛の書簡。

28 May, 1923.

Captain E. Fujita, I.J.N. A.D.C. to Minister of Marine.

Ministry of Marines, Tokyo, Japan

My dear Captain Fujita :

I have the honor to confirm herewith a conversation
held with Commander Ko, I. J. N., Saturday, 26 May, 1923.

Several days ago our Embassy received notice from your
South Sea Island Bureau that Mr. R. H. Ellis had died on 12
May, 1923, at Parao, Caroline Islands, and information was
requested of the Embassy as to what disposition the South

シーモア症 (心身譫妄症) ニテ死去ス。

死体ハ仮埋葬ニ付シ遺留品保管中 右移牒ス 別添。

尚 洪中佐ヨリ口頭返事申上置□□通り 南洋庁ハ従来海
軍ノ管轄トニアリシモ、昨年四月以来、全ク海軍ノ手ヲ離
レ居ルモノニ付、爾後ノ御交渉ハ外務省ヲ經テ南洋庁ニ致
サル事適當ト存シ□□候申□□。右御返事迄□□貴意申□
敬具」

〈史料6〉 大正十二年五月二十九日 発簡 官房一九四八
号

「米國大使館付武官補佐官ヒューリントス大尉宛

省副官発

前略 昨日付貴簡□□御申旨ハ 便宜上当方ヨリ当地南洋
庁出張所ニ通知致□□処。御希望通り横浜迄死体送付ノ件ハ
仮埋葬後ノ今日 先方ノ情況不明ニ付 直チニ御返事ハ不
可能ナルヲ以テ 早速『ハラオ』宛御希望ノ要領並ニ『エ
リス』氏方旅券通りノ商人ニ非スシテ 現役米國海軍中佐
ナル事ヲ電報通知致ヘク 其返事到着次第何分ノ御回答可
イタス事ニ□□之□。」

〈史料7〉 大正十二年五月三十一日 南洋群島在勤武官発

海軍省・軍令部副官宛

「商業視察ト称シ、旅行中ノ米國人 Ellis 酒精中毒、五月
十二日コロールニテ死亡。遺物ニハ軍事関係書類ヲ発見セ
ス。本人ハ現役海軍中佐ノ由、事実ナリトセハ、職業ヲ偽
リ旅行承認ヲ得タルモノト認ム。遺物米國官憲ニ渡シ差支
ナキヤ。至急何分ノ御指令ヲ仰ク。」

この電報の欄外に「不都合ナ行動ナルモ、ダマツテ口テ、当方デ同種ノコトヲヤッタ場合ノ言ヒ懸リニ、トットクガヨシ」との記註があり、捺印があるが判読不能。また、欄外に同じく担当者（小林の印鑑あり）の「本件、今後外務省ノ取扱フコトナレリ。是旨副官カラ武官宛発電ス〔ベ〕シ」との記註がある。

〔史料8〕 大正十二年六月十一日バラオ南洋群島在勤武官発・海軍省副官宛

「五月二十九日発電セル米國四三〇ノ件、至急何分ノ返電ヲ待ツ」

〔史料9〕 大正十二年六月十二日 海軍省副官 在「バラオ」南洋群島在勤武官宛

「米國人四三〇ノ件 海軍省ハ関係セズ、外務省ヨリ返事アル筈」

〔史料10〕 大正十二年七月二十九日 バラオ 南洋群島在勤武官発 海軍省・軍令部副官宛

「横浜米國海軍病院薬剤科長 七月二十一日当地着支庁長ヨリ四三〇ノ死体及遺物受取其他後始末完了セリ。死体開棺検分スルコトナク、七月二十七日火葬ニ付、死因ニ付テハ十分了解セルモノノ如シ。七月二十九日」

〔註〕

史料 1、6、8、10、11は海軍省副官編『大正十二年度米國大使館付武官往復文書』に、史料7および9は『大正十二年 公文備考（外交・外国人）一五二卷』に所収され

防衛研究所戦史史料室が所有している。

また、外務省外交資料館の『帝國委任統治地渡航ニ關スル件』にはエリス少佐の渡航に關し

一九二二年十月二十五日 シドニー総領事発 外務大臣宛。

「New York Hughes Company 代表者 Earl Ellis ナル者、商業視察ノ為 Marshal Caroline 諸島へ渡航致シ度キ由ヲ以テ旅券ノ査証願出ノ次第アリタルニ付テハ、右査証ヲ与へ差支ナキヤ。御回電ヲ乞フ。」

及び、外務省の問い合わせに対する海軍の回答

一九二二年十一月九日 海軍次官 井出讓治発 外務次官 田中都吉宛

「客月二十六日付歐二普通三六一号ヲ以テ御申越ノ件ハ、New York Hughes Company 及び其代表者 Earl Ellis カ、旧敵國ニ国籍ヲ有スルモノニ在ラサルニ於テハ、差支無之候。右回答ス。追テ右渡航ノ際ハ、其ノ旅程ヲ予メ当省へ通知方然御取計相成度。」

等四通の電報及びエリス少佐のミクロネシア渡航に關し、支援を与えた元海兵隊員で「北マリアナ群島に關し米海軍情報部に最も多くの情報を送った」と言われるハワイのビショップ博物館員ホルンスボステルに關する人物情報がある。

（防衛研究所戦史部）